



Title	英語検定試験の利用と換算表：大学における英語能力の質保証
Author(s)	鈴木, 久男; 佐々木, 伸
Citation	高等教育ジャーナル：高等教育と生涯学習, 31, 25-36
Issue Date	2024-04
DOI	10.14943/J.HighEdu.31.25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/91703
Type	bulletin (article)
File Information	HighEdu.31_p25-36.pdf



[Instructions for use](#)

Use of English Proficiency Tests and Conversion Tables: Quality Assurance of English Proficiency at Universities

Hisao Suzuki^{1)*} and Tadashi Sasaki²⁾

1) Graduate School of Science, Hokkaido University

2) Faculty of Commerce, Kumamoto Gakuen University

英語検定試験の利用と換算表 —大学における英語能力の質保証—

鈴木 久男^{1)**}, 佐々木 伸²⁾

1) 北海道大学大学院理学研究院

2) 熊本学園大学商学部

Abstract — This study examines the admission requirements for English language proficiency at U.S., U.K., and Australian universities. Although institutions accept multiple English proficiency tests, the score conversion methods vary among universities and from the official published guidelines. Therefore, we propose a comprehensive conversion table. This table is grounded in the Cambridge English Scale and the Common European Framework of Reference for Languages (CEFR). It incorporates scores from widely accepted tests such as IELTS, TOEFL iBT, Duolingo English Test, and PTE-Academic, as well as EIKEN, GTEC, TEAP (CBT), and TOEIC, which are common in Japan. The table spans the CEFR levels ranging from A1 to the uppermost limit of C1, offering particular utility for those at the A2 and B1 levels, which are the most common levels among Japanese high school students. This conversion table can serve as a helpful resource for university admissions and for grading English courses at the university level.

(Accepted on 9 January 2024)

1. 導入

グローバル化の中で、英語能力はグローバルに情報を収集し、活躍していくためのツールである。Society 5.0 社会（日本経済団体連合会，2018）にお

いて、多くの社会人には AI やロボットに取って代わられることのない、新しい価値を創造してく資質が期待されている。そのためにも世界的な調査や多様な文化・経歴をもった人々との交流が必要とされ、英語能力向上は重要な教育課題の一つである。

*) Correspondence: Faculty of Science, Hokkaido University, Sapporo 060-0810, Japan
E-mail: hsuzuki@particle.sci.hokudai.ac.jp

***) 連絡先：060-0810 札幌市北区北 10 条西 8 丁目 北海道大学大学院理学研究院

Education First (EF) 社が実施するテストの結果に基づいて算出される English Proficiency Index (EPI) によれば、2022年に日本の順位は111ヶ国・地域中80位となり、前年よりも低い結果となった (Education First, 2022)。対象となる国・地域の数が毎年変化しているため、順位の低下をもって日本全体で英語能力が低下したとは結論できないが、英語能力の向上が重要な課題であることは論を俟たないだろう。むしろ英語能力向上にあたっては2020年より実施されている新学習指導要領において、小学校からの英語授業導入や、「話す」、「書く」能力の向上を重視するなどの改革が進められている。大学教育は多くの学生にとって最終的な教育であることから、大学教育における英語教育の重要性は一層増しているともいえる。大学教育の中での英語能力向上のためには、英語で開講する授業の導入等がなされてきたが、専門課程の授業を英語で行うことは日本人学生にとって高い障壁になってしまうなどの弊害も生じている (森住, 2015)。もともと英語学習には長い年月がかかるので、大学教育で行うことにも限界があるのと同時に、「話す力」、「書く力」が極端に低いため、英語での授業における、聞き取り、ノートテキングに直接的な支障が生じることとなる。

学力の可視化が叫ばれる中で、外部からの客観的指標の導入は、英語能力の可視化につながり、学生自身の能力の客観指数としてだけでなく、英語教育向上のための内部質保証制度の構築のためにも有用であろう。事実大学における英語運用能力の客観的指標として、英語資格・検定試験が用いられることが多い。ただし、多くは安価な2技能試験となっているが、英語4技能教育の可視化のためにも4技能英語資格・検定試験の導入が望ましい。むしろ、2技能試験であってもTOEICのようにビジネスに有用な試験もあるが、これらはキャリアサポートとして用いるべきであり、英語運用能力の測定には4技能試験が最も適していると考えられる。

大学での利用の参考として、入試での利用についてみていこう。英語4技能試験の入試での利用については、入学者選抜への導入が試みられた。文部科学省は2020年度実施の大学入学試験より、英語4技能を適切に認定するため、民間事業者実施の英語資格検定試験の利用を求めた。しかし2019年に、

経済的・地理的格差が解消されないことから、導入を見送った経緯がある。2019年には、「大学入試のあり方に関する検討会議」が設置され、2020年には日本学術会議において「大学入試における英語試験のあり方についての提言」(日本学術会議, 2020)が出された。この中において(1)「4技能」を切り分けて入学試験を課すことの問題点、(2)「書く」、「話す」力を、大規模な入学試験で計測することの問題点、(3)民間試験を大学入学共通テストの枠組みで実施する上での問題点、(4)CEFR(欧州言語共通参照枠)を入学試験に用いることの問題点、(5)検討のあり方にかかわる問題点、などが指摘された。そして提言としては、共通テストの枠内に組み込まず、4技能試験については各大学が必要に応じて実施し、民間試験の利用は大学が個別に判断するとした。しかし、大学側にとって4技能測定は多大な労力を要するため、大学独自での実施は事実上困難である。また異なる英語資格・検定試験の相互の換算をどのように考えたら良いのかについて指針が曖昧である。

大学入試において検討された多くの問題は、高等教育での利用と共通するものである。とりわけ、地方大学での利用は、経済的・地域的格差から不利となると考えられる。しかし、2019年に問題となった4技能試験の地域的格差について2023年現在ではやや解消されつつある。それは、コロナ禍を経て、多くの英語試験でオンライン受験の導入が進んだということである。また、Duolingo English Test (DET)のように、オンラインでしかも安価に受験できる英語試験が登場してきたこともある。実際、後でみるようにアメリカの多くの大学でIELTSやTOEFLなどと並んでDETが英語能力要件として認められているのである。このように以前のような英語試験における経済的・地域的格差問題が解消されつつある今、英語試験について学士課程入学や学士課程での英語能力向上のための導入について再検討しても良いと考えられる。

現在、英語4技能試験の成績を単位化し、学生の英語能力向上に役立てている大学は少なくない。こうしたとき問題となるのは、成績のグレードとの対応である。たとえばCEFRの分け方は大変大まかであるので、あるレベルにかろうじて届くくらいの学生はあえて上位のレベルに届くまで勉強する意欲

はなくなってしまう。実際 CEFR のレベルを変えるためには多くの勉強量が必要である。また、あるランクまであとわずかの得点の学生にとっては、それよりかなり得点が低いものの同じ CEFR のランクの学生と同等に捉えられてしまうのは不公平でもある。また、海外の大学の入試においても、CEFR のような大まかな分け方では、英語能力の優劣は付けがたく、より詳細な分けをした上で英語資格・検定試験の換算表が必要となる。むしろ、一番の問題と考えられるのは、各種試験の換算についてである。しかし、海外ではすでに多くの英語 4 技能試験を用いての大学入試や大学院入試が行われている。そのため、ここで海外の入試での利用について調査検討を行い、日本の実状にあった形の換算表を作成することは、高等教育における英語資格・検定試験の利用あるいは入試への導入にとって有用であると考えられる。

本稿の目的は、海外における英語資格・検定試験の換算表の利用について調査し、日本の実状に合わせた換算表の作成とその利用法を見ていくことである。

次節では、相互の換算について考察するため、海外の学士課程入試で導入されている英語・資格検定試験について、換算がどのように行われているかをみる。特に TOEFL iBT と IELTS について、多くの大学において公式発表の換算表とやや異なる換算となっていることを見る。3 節では、換算表が大学によって異なる理由を考察するため、順位パーセントに基づく比較について一例を見る。4 節では内挿曲線により各種英語資格・検定試験に対して、CEFR レベルに基づくスコアの換算表を作成し、大学での利用法を提案する。換算表作成の技術的な詳細は付録にまとめる。最後に 5 節で本稿の内容をまとめる。

2. 英語圏の大学における英語資格・検定試験の学士課程入試での利用について

2.1 用いられる英語資格・検定試験の種類

英語圏の大学で学ぶために英語能力は必須であるため、各大学は 4 技能試験を用いて英語能力を測定

し、入学のための最低要件を試験ごとに設けている。この最低要件を比較することで、英語資格・検定試験ごとのスコアの換算を、各大学がどのように考えているのか読み取ることができる。

コロナ禍での減少を別として、世界的に留学生数は増加を続けており、中でもアメリカ、イギリス、オーストラリアが人気である。そこでこの 3 国における学士課程入学のための英語能力要件を比較していく。

最初に現在世界最大規模である IELTS である。IELTS は、高等教育機関への入学のみならず、移民審査、就職資格などに用いられており、2022 年には年間 350 万人程度が受検している。これには General Test と Academic Test があるが、海外の大学での入学要件に用いられるのは IELTS Academic である。他方、アメリカ型の TOEFL-iBT に加えて、Duolingo English Test (DET) が加えられつつある。また、イギリス型教育システムは世界で最も普及したシステムであり、ケンブリッジ英語検定による Cambridge English Scale (以下ケンブリッジスケールと呼ぶ) あるいは CEFR 基準が有名である。なお、イギリス型では PTE-Academic が普及しており、イギリスやオーストラリアの多くの大学の他、アメリカの一部の大学で用いられているがここでは考慮しないことにする。

2.2 公式の換算表

これらの各種試験の実施主体からは、互いのスコアの換算表が公式に示されているものがある。例えば (ETS, 2010; Cushing & Ren, 2022; Cardwell *et al.*, 2023; Cambridge Assessment English, 2019b) では TOEFL iBT, DET, ケンブリッジスケールそれぞれと IELTS のバンドスコアとの換算が与えられている (表 1)。DET については 2022 年から 2023 年にかけて、IELTS との対応に大きな変更があったため、両年度の数値を掲載している。

このように各種試験同士の換算については公式にその対応関係が与えられているが、入試における要件として複数の資格・検定試験の利用を認めている大学においては、必ずしもこれらの換算表が用いられているとは限らず、むしろ大学ごとに独自の換算

表1 IELTSと各種スコアの換算表

IELTS Band	TOEFL iBT	DET (2022/2023)	ケンブリッジスケール
9.0	118	155/160	209
8.5	115	145/160	205
8.0	110	135/150	200
7.5	102	125/140	191
7.0	94	115/130	185
6.5	79	105/120	176
6.0	60	95/105	169
5.5	46	85/95	162
5.0	35	75/80	154
4.5	32	65/65	147
4.0	—	55/55	142

を用いていることが多い。以下、各国の換算の傾向を見ていく。なお、以下では各大学の2022年度における入試要件を検討対象とするため、DETとIELTSとの対応についても現行のものではなく2022年度の数値を用いることとする。

2.3 アメリカでの換算の傾向

アメリカの多くの大学では、入学時には専攻をきめておらず、3年次進級までに専攻を決めるというリベラルアーツ型である。そのため、入学時の最低要件も専攻別などでなく、大学として一括の基準となっている大学が多い。今回 US News & World Report (2021年度)におけるランキング上位大学を中心に50校の調査を行った。ただし、州立大学の中には、州内の大学すべてで同一基準としているところと、大学ごとに基準を作っているところもあるため、全体としての大学数として不定性があることにも注意しておく。しかしそれでも全体の傾向は大まかに認めることができる。現在ほとんどの大学がWebで入学要件を公開しており、特に留学生についての最低要件は、ほぼすべての大学で公開している。2022年度について例外としては以下の大学がある。まず、ハーバード大学は英語試験の提出は求めている。またスタンフォード大学では、英語試験でなくSATまたはACTの試験スコアの提出を求めている。ノースウエスタン大学、フロリダ大学、カリフォルニア工科大学では公表されていなかった。逆に言うとそれら以外は見つけることができた。2022年

の時点でIELTSとTOEFL iBTに加えてDETを認めているのは32大学であった。これには、マサチューセッツ工科大学やコーネル大学、コロンビア大学などのアイビーリーグ大学が含まれており、DETの採用は英語要件の低い大学だけに限らない。

まず傾向としてIELTSスコアを6.5としている場合、TOEFL iBTスコアは79または80、DETでは105というほぼ公式のものとなっている。州立大学の多くはこの換算レートである。ただし、DETについてはUCバークレーのように115とするところもある。他方選抜性が高く、IELTSスコアの基準を7としている大学については、TOEFL iBTスコアは公式よりやや高い100としている大学がほとんどである。ただし、MITでは90と公式に近い。また、MITを含む5大学においてケンブリッジ英語検定の利用を認めているがいずれも公称値のものである。IELTSスコアの基準が6という大学はランキング上位を中心にしたせいかなり多くは調べられず、このため一般的な傾向を言うことはできない。ただし、調査したブルックリンカレッジでの換算は公式のものであった。

2.4 イギリスでの換算の傾向

イギリスの多くの学士課程は3年で、入学時に専門が決定している。そのため、専攻ごとに基準が異なる大学も多い。それらの換算表が大学で管理されていることが多いので、大学によるIELTSとの換算表がわかることになる。

イギリスについてはランキング上位を中心に20大学について調べた。IELTSスコア7を基準としている大学のほとんどはアメリカ同様TOEFL iBTスコアが100となっているが、IELTSスコアが6.5の大学では、90となっている大学がほとんどでありアメリカの大学より高く設定している傾向が見られた。IELTSスコアを6.5としている大学11校中、TOEFL iBTスコアの基準を80としているのがわずか1校であった。ウォーリック大学では、各種試験のスコアごとの互換表を公表しているが、どのレベルでもIELTSスコアに対応するTOEFLスコアは高めに設定されている。この傾向はマンチェスター大学でも同様だが、シェフィールド大学では公式のも

のと同じ換算表を公表している。DET を採用しているのは7校とアメリカに比べて比率が少ない。また、ケンブリッジ英語検定はほぼすべての大学で認められている。

2.5 オーストラリアでの換算の傾向

オーストラリアもヨーロッパ型であり、学士課程は3年で、入学時に専門が決まっている。そのため、入試要件は専門ごとの公表となる。ただし、大学として換算ルールを決定して公表しているところも多い。

やはり有名校を中心に調査したこともあって、IELTS 6.5 に対応する TOEFL iBT スコアを 79-85 とする大学がほとんどであった。IELTS 6 に対応するものも、ほとんどが公式の換算に従っていたが、タスマニア大学やフリンダース大学では TOEFL iBT スコアを 72 と高めの点数にしている。

3. IELTS と TOEFL の 順位パーセントによる比較

2節でみたように、TOEFL iBT や IELTS, DET などは対応についてスコアの相関に基づく研究があるものの、多くの大学ではこの公式の対応と別の対応を用いていることがわかる。他方、TOEFL iBT と IELTS は受験者数が非常に多いため、順位パーセントでの対応も有用であると考えられる。実際それぞれのテストは傾向が異なるため完全な比較は困難なのである。そのような対応の例として、アメリカの大学アドミッションでは ACT と SAT のテストの順位パーセントに基づく換算表が利用されている。これらの換算表が認められている背景には、双方を受験した生徒のスコアの相関よりも順位パーセントでの比較が自然であると考えられていることがある。すまわち、生徒は ACT, SAT いずれのテストを受験してもよいが、その中での相対的な成績を見れば生徒の学力の証拠として機能すると考えることができるためである。

そこでここでは、IELTS と TOEFL の公開されているデータに基づいて、順位パーセントによる比較

表2 IELTS スコアと順位パーセント

IELTS バンドスコア	順位パーセント (%)
9.0	99
8.5	99
8.0	98
7.5	94
7.0	85
6.5	72
6.0	52
5.5	27

表3 TOEFL iBT スコアと順位パーセント

TOEFL iBT スコア	順位パーセント (%)
120	100
116	99
112	95
108	89
104	81
100	72
96	62
92	54
88	46

をしてみよう。IELTS は 2022 年のデータ (IELTS 2023), TOEFL iBT は 2021 年のデータ (ETS2022) を用いて比較してみよう。受験目的や受験者の属性ごとの順位パーセントがそれぞれ公開されているものの、残念ながら両者に共通する項目がない。そこで比較的近いと考えられる集団として、IELTS は「3ヶ月以上の高等教育コースのため」に受験した集団、TOEFL iBT は「大学の学部学生」の順位パーセントを取り上げ、その一部をそれぞれ表 2, 3 に示す。ただし IELTS の元データでは各バンドスコアに該当する受験者数の割合が示されているが、その合計が 100% にならないものが存在する。これはおそらく丸め込み誤差に起因すると思われるが、この表には元データから算出された数値をそのまま掲載している。

この表から両者のスコアの対応を考えると、IELTS バンドスコア 7.0 は TOEFL iBT スコアでは 104 点から 108 点の間に相当し、IELTS 6.5 は TOEFL iBT の 100 点に相当することが分かる。この対応は、公式のものと異なり、イギリスの多くの大学で用いられている対応表に近いものになっていることがわかる。

4. 英語資格・検定試験の換算

2節においてアメリカ、イギリス、オーストラリアの大学においては、必ずしも公式値通りの換算とは限らず、大学ごとの方針によって比較的自由に換算をしていることを見た。そのため、日本の大学において4技能試験を導入する場合にも、必ずしも公式のものにこだわる必要はないことがわかる。ただし、日本の英語4技能試験では別の事情が発生する。第一には、対応の証拠についてである。海外のテストでは、同時受験による比較データとともにおおよその公式の換算表が公表されている。日本学術会議(2020)が指摘しているように、CEFRレベルの判定はCan do文に基づいているため原理的に曖昧さを孕んでいる。ただし英語圏で実施されている試験については、CEFRとの直接の対応ではなくむしろケンブリッジスケールとの対応、あるいはそれと対応づけられたIELTSとの対応に基づいてCEFRレベルの判定がなされている。つまりCEFRレベルの判定には、ケンブリッジスケール、あるいはそれとの対応が確立した他の試験との平行テストなどによる比較値を根拠として公表することが必要不可欠である。しかしながら、日本固有の英語資格検定試験のほとんどにおいて、対応値の根拠が公表されていない。そのため、各検定試験のCEFR区分を用いることの妥当性が十分でないことである。

第二に、公開されているのがCEFRの区分のみであることである。たとえば「平成29年度英語力調査結果(高校3年生)概要」(文部科学省, 2018)によると、高校生のほとんどがA1, A2, B1レベルである。大学レベルでは大学ごとにさらに分布幅が狭くなることが考えられる。そのため、現行の英語授業の成績に代えて4技能試験を用いるときには、CEFR区分の対応だけでは今までの英語成績の分布を再現するのに不十分である。

これらの欠点は、できるだけ細分化された換算表を用いることによって緩和される。すなわち、細分化された換算表を用いればCEFRのボーダーライン点数が仮に少しずれたとしても、換算での点数のずれも少ないため、影響は少ない。このことから、日本の多くの検定試験におけるボーダーライン点数の根拠の不確定性の影響は少なくなる。また、細分

化された換算表を基にした得点において、相対評価などを行うことにより、現行の成績分布に近づけることができるのである。

このようなことから、本稿では各種英語資格・検定試験の統一的な換算表を作成することにする。換算の対象とする試験については、前節までで見てきたケンブリッジ英語検定, IELTS, TOEFL iBT, DET, PTE-Aの他、実用英語技能検定(英検), GTEC, TEAP, TEAP CBT, TOEIC L & R/S & Wを取り上げる。以下でこれらの試験の概要と、換算表作成における基本的な考え方を述べる。

4.1 ケンブリッジ英語検定

ケンブリッジ英語検定は国際的に通用するアカデミック英語を含む留学資格として用いられるスタンダードである。ケンブリッジ英語検定では測定の精度を上げるためCEFRのランクごとに試験が行われ、各試験の点数は共通のケンブリッジスケールにより表される。一般および高等教育向けの試験としてはA2 KeyからC2 Proficiencyまでの5段階の試験があり(Cambridge Assessment English, 2019a)、たとえばB2 Firstでは主にケンブリッジスケール160~180点までの測定がなされる(表4)。B2 Firstは英語圏の大学に入るのには不十分であり、Foundationコースという、大学予備コースへの入学資格のために使われる。一方で例えばC1 Advancedではケンブリッジスケール180~210点までの測定がなされ、大学入学資格として用いられる(表5)。CEFRレベルとの対応は全ての試験において共通であり表6の通りである。

表4 B2 Firstにおける評価とケンブリッジスケールおよびCEFRレベルの対応

ケンブリッジスケール	B2 Firstでの評価	CEFR
180-190	A	C1
173-179	B	B2
160-172	C	
140-159	Level B1	B1

表5 C1 Advancedにおける評価とケンブリッジスケールおよびCEFRレベルの対応

ケンブリッジスケール	C1 Advancedでの評価	CEFR
200-210	A	C2
193-199	B	C1
180-192	C	
160-179	Level B2	B2

表6 ケンブリッジスケールとCEFRレベルの対応

ケンブリッジスケール	CEFR
200～	C1
180～	C2
160～	B2
140～	B1
120～	A2
100～	A1

4.2 その他の資格・検定試験の特徴

まず、世界的に認知されている英語試験からみていこう。最も受験生が多いのはIELTSである。IELTSの試験には2種類あるが、英語圏の大学で学ぶための能力測定にはIELTS Academicテストが該当する。IELTS Academicはペーパーテスト、コンピュータテストの他、オンラインテストも始まっている。

TOEFLは、Test Of English as a Foreign Languageの略で、主として留学するための試験となり、アカデミック英語色がもともと強いと言える。主にアメリカ英語ということもあり、ヨーロッパの大学では、IELTS、アメリカの大学ではTOEFLといった傾向はあるが、留学生は自分にあったテストを受験する傾向がある。

PTE (Pearson Test of English) Academicは、日本での知名度は低いが、世界的に非常に多くの大学の入試要件としても採用されており、イギリスやオーストラリア、ニュージーランドのVisa取得要件としても採用されている。ただし、アメリカの州立大学クラスではまだ採用していないところも多い。

DETは、コンピュータベースの完全オンライン試験でありながら、AI技術によって測定効率を上げると共に、剽窃等を防止していることから、近年アメリカの大学を中心に資格として導入されてきた。

コロナ対応で一時的に採用するという動きであったが、結果が良かったせいか、アメリカの州立大学の他スタンフォード大学やMITなど非常に多くの大学で採用されてきている。テスト理論に基づく問題の選択をしていくので短時間で効果的な判定が可能となっているほか、何よりも受験料が50ドル程度とやすいのが魅力である。つまり、受験機会にとっての、経済的問題や地理的問題がこの試験によって大きく緩和されることになる。

TOEIC L & Rは、リスニングとリーディングに関する2技能試験であり、実用英語としておそらく世界で最も普及している。一方、スピーキングとライティングに関する試験であるS & Wについては受験生も少なく、また会場も現状では少ない。

続いて日本国内に特化している試験について見ていく。日本英語検定協会によるTEAP (Test of English for Academic Purposes)は日本の大学入試におけるアカデミック英語を主体とした4技能試験であり、現状の日本の個別学力試験と非常によく似ている。ただし、受験層である高校学習者を意識してCEFRのA2からC1レベルに設定されているため、高いレベルでの分解能が高くない。

TEAPにはコンピュータベースの試験であるTEAP CBTも存在する。こちらはアカデミックな英語を目的としているが、C1レベルの分解能がない。このため難関大学では採用が困難であろう。ただし、TEAPよりも思考力重視となっている。

同じく日本英語検定協会が実施する英検(実用英語技能検定)は、TEAPとは対照的に日常生活や職場での英語能力を対象としている。5級から1級まで7段階の試験が用意されているが、それらに共通するスコアとして英検CSEスコアが用いられている。1級の試験はCEFRのB2からC1レベルに該当しているため、TEAPと比較して高レベルでの分解能が良いと言える。

GTECはベネッセコーポレーションによる英語4技能テストである。GTECにはCore, Basic, Advanced, CBTの4種類の問題タイプが存在するが、そのうちCEFRのC1レベルまでの判定が可能なのはCBTのみである。ただしC1レベルに該当するのは1400点満点中1350点から1400点までの範囲に限られるため、C1レベルでの分解能は低い。

最後に、今回は換算の対象に含めないが、2つ紹介する。CAEL (Canadian Academic English Language assessment) はカナダやアメリカなどの試験会場での受験だけでなく、オンライン版も存在するため、世界各地で受験できる。4技能試験であり、カナダの大学の英語能力証明試験としても利用されている。受験料が50カナダドル程度と安価であるのも魅力的である。IELTSやCEFRとの対応の研究もされている (Paragon Testing Enterprises, 2017, 2021) が、CEFRとの対応はB1からC1レベルの狭い範囲に限定されており、日本の大学入試での利用には適さないため今回は見送ることとする。

この他多くの国でも4技能試験をもっており、国内の入試で利用されている。たとえばマレーシアには、Malaysian University English Test (MUET) という英語4技能の試験があり、シンガポール国立大学などでの英語試験として認定されている。2021年からCEFRに沿った評価も取り入れてきている。

4.3 換算表の作成方法

2.2節で見たように、各種試験実施団体はその他の試験のスコアとの換算についてさまざまな情報を公表している。その際によく用いられる方法の1つは、同一の受験者が複数の試験を受験したデータを使用し、その得点の相関に基づいて換算を決定する方法である。もう1つの方法としては3節で見た順位パーセントを用いるものがある。これらの方法はいずれも試験の点数や順位に基づくものであり、各種試験が英語能力の同じ測定しているかという点で疑問が残る。

ここでは受験者の英語能力により焦点を当てた換算とするため、各種試験の各CEFRレベルに該当するボーダーラインを使用して換算表を作成する。つまり、CEFRレベルのボーダーラインの得点の換算については、各種試験実施団体が公表している得点を用いることになる。問題となるのはボーダーライン間での換算であるが、ここでは各種試験の得点をケンブリッジスケールへと変換し、それを介して各種試験の換算をする。ケンブリッジスケールを介した換算としたのは、CEFRの開発にケンブリッジ英語検定が関わっており、ケンブリッジスケールと

CEFRとの対応が確立しているためである (Cambridge English, 2023)。ボーダーライン間の換算を求める技術的な説明については付録に譲る。

今回作成する換算表は、各試験の実施団体が公表するCEFRレベルとの対応に基づいていることから、今後その対応に変更があった場合はそれに応じてこの換算表を改訂する必要がある。しかし、換算表自体はボーダーラインのスコアに応じて機械的に算出できるため、改訂自体は即座に可能である。

4.4 2技能試験との併用

英語能力の測定として4技能試験が望ましいことは確かだが、多くの大学ではTOEFL ITP試験のように、比較的安価で大学側が管理しやすい試験が実施されている。また、ビジネス英語に近いTOEIC L & R試験は、就職活動などの観点からも受験が推奨されている。これら2技能試験では、スピーキングやライティングの技能の向上に問題が生じるが、現実問題としては、これらの試験結果を用いるが、それ以外の4技能試験を推奨するといった対応を取らざるを得ない。また、大学院入試などにおいても、TOEFL ITP試験などと共に、それらを受験しなかった受験生のためにも、他の4技能試験の成績を求めるところもある。このような事情を考慮して、前述の4技能試験だけでなく2技能試験、具体的にはTOEFL ITPとTOEIC L & Rも含めた換算表を作成することにする。

その方法の1つとしては、CEFRが4技能それぞれについて基準を与えていることから、2技能に限ったスコアとCEFRレベルとの対応に基づいた換算である。実際、TOEFL ITPとTOEIC L & RについてはどちらもCEFRレベルとスコアとの対応が公表されている (ETS2023; 国際ビジネスコミュニケーション協会, 2023)。もう1つの方法は、こちらも4技能の場合に用いることができるものだが、順位パーセントに基づく換算である。ここでは4技能の場合と統一して、前者の方法を用いた換算表を作成する。換算表作成の詳細は4.3節と付録を参照されたい。

4.5 作成した換算表とその利用

前節までの内容に基づき換算表を作成した。紙幅の都合上ここでは抜粋したもののみ表7に示す。換算表の完全版は著者の Researchmap マイページ (https://researchmap.jp/ssktds/published_works) からダウンロードすることができる。列ごとに各種試験のスコアおよび CEFR のレベルが対応するよう示されている。スコアが空白となっているセルについては、同列のそのセルより下にある空白でないセルと同じスコアが継続しているものと解釈する。例えばケンブリッジスケールの186点および187点はどちらも TOEFL iBT では101点に相当する。換算の範囲は、CEFR の A1 レベルから C2 の下限までとした。IELTS や TOEFL iBT など C2 レベル内での分解能を持つ試験も含まれているが、日本の大学入試や授業での使用を想定し C2 レベルでの換算は考慮していない。実際、日本国内に特化した試験である GTEC や TEAP 等は C1 レベル全体での分解能を持っていない。

この換算表と2節で述べた海外の大学入試要件で用いられている換算を比較する。IELTS と TOEFL iBT との対応では IELTS バンドスコア7に対して TOEFL iBT スコア100となっており、これはアメリカやイギリスの大学で用いられている要件と合致している。IELTS バンドスコアが6.5に対する TOEFL iBT スコアは90であり、これはイギリスで用いられている換算と一致している。一方で DET との対応については、2023年度の CEFR レベルとの対応に基づいて換算表を作成したことから、2022年度までに用いられている入試要件とは一致しない。

IELTS との換算について表7と公式の換算(表1)とを比較すると、TOEFL iBT のスコアは全体的に表7で高くなっているが、DET のスコアは公式の対応と大差がないことがわかる。

大学入試においてこの換算表を用いる場合、多くの大学では C1 以上の学生が少ないことから、B2 または C1 以上を満点にするなどとして100点法にするのが妥当であろう。また、4技能試験に加えて2技能試験も併記しているが、日本人はもともとスピーキングやライティングスキルが平均的に低い傾

表7 ケンブリッジスケールと CEFR レベルに基づく換算表(抜粋)

ケンブリッジスケール	IELTS	TOEFL iBT	DET	CEFR
200	8	114	155	C2
199		113		C1
198		112		
197		111		
196		110	150	
195		109		
194		108		
193		107		
192		106	145	
191	7.5	105		
190		104		
189		103		
188		102	140	
187				
186		101		
185	7	100		
184		99	135	
183		98		
182		97		
181		96		
180		95	130	
179		93		B2
178		92		
177		91	125	
176	6.5	90		
175		89		
174		88		
173		87	120	
172		86		
171		85		
170		84	115	

向があるため、運用上は、この換算表と共に4技能試験への得点1.1倍換算や一律10点を加算するなどして、4技能試験の受験を促進するなどの対応も考えられる。

5. まとめ

本稿では、大学の入試や教育において民間の英語資格・検定試験を導入するために必要となるスコアの換算について論じた。まずアメリカ、イギリス、オーストラリアの大学で入試要件として用いられている換算表は、公式の換算だけでなく大学独自の換

算が多く見られることがわかった。これらの差の多くは、アカデミック英語をどの程度重視するか之差が一因であろう。たとえば TOEFL iBT のライティング問題では、ノートテイキングを想定して与えられた内容を要約するものがある。大学ではこのスキルは大変重要であるため、大学ごとのこれらのスキルの重視の差が換算表に現れることになると考えられる。

日本においては日本の英語 4 技能試験の CEFR のボーダーラインについて十分なデータが公表されていないことと、また既存の成績に代えるために CEFR よりも細分化された換算表が必要となることを述べた。むろん、一つの試験に限定するという考え方もあるが、学生の環境によっては不利益を生じることが考えられる。ただし、自宅で比較的自由に受験できる DET が登場したことで、この試験に統一することも一つの方法と考えられる。一方海外の大学院受験を考える場合には、TOEFL や IELTS などを対象としても良い。

今回作成した換算表は日本の大学における利用を想定しているため、国際的に用いられている IELTS や TOEFL iBT などに限定せず、日本国内に特化した試験も取り入れている点が特徴である。また、2 技能試験との対応も含めて掲載しているが、実際の運用では 4 技能試験に対するインセンティブを付与するなどの対応も検討する必要があるだろう。日本の高等教育機関の現状に応じた、より具体的な運用方法の検討や、換算表の妥当性の検証を進めることが今後の課題である。

文献

Cambridge Assessment English (2019a). The Cambridge English Scale explained. Retrieved August 24, 2023, from <https://www.cambridgeenglish.org/Images/210434-converting-practice-test-scores-to-cambridge-english-scale-scores.pdf>

Cambridge Assessment English (2019b). Comparing scores to IELTS. Retrieved August 24, 2023, from [\[to-ielts.pdf\]\(#\)

Cambridge English \(2023\). Common European Framework of Reference for Languages \(CEFR\). Retrieved August 25, 2023, from <https://www.cambridgeenglish.org/english-research-group/fitness-for-purpose/>

Cardwell, R., Nydick, S., & Lockwood, J. R. \(2023\). *Considering inter-test relationships in high-stakes admissions testing: The case of English*. ALTE 8th International Conference, Madrid.

Cushing, S. T. & Ren, H. \(2022\). Comparison of IELTS Academic and Duolingo English Test. *IELTS Partnership Research Papers*, 2021/1.

Education First \(2022\). EF English Proficiency Index, A Ranking of 111 Countries and Regions by English Skills. Retrieved May 31, from <https://www.ef.com/wwen/epi/>

ETS \(2010\). Linking TOEFL iBT Scores to IELTS Scores - A Research Report. Retrieved July 22, 2022, from <https://www.ets.org/pdfs/toefl/linking-toefl-ibt-scores-to-ielts-scores.pdf>

ETS \(2021\). Performance Descriptors for the TOEFL iBT Test. Retrieved August 24, 2023, from <https://www.ets.org/pdfs/toefl/toefl-ibt-performance-descriptors.pdf>

ETS \(2022\). TOEFL iBT Test and Score Data Summary 2021. Retrieved July 22, 2022, from <https://www.ets.org/pdfs/toefl/toefl-ibt-test-score-data-summary-2021.pdf>

ETS \(2023\). TOEFL ITP Scoring. Retrieved August 25, 2023, from <https://www.ets.org/toefl/itp/scoring.html>

IELTS \(2023\). Demographic data 2022. Retrieved August 27, 2023, from <https://www.ielts.org/for-researchers/test-statistics/demographic-data>

国際ビジネスコミュニケーション協会 \(2023\). TOEIC Program 各テストスコアと CEFR との対照表 Retrieved August 27, 2023, from \[https://www.iibc-global.org/toEIC/official_data/toEIC_cefr.html\]\(https://www.iibc-global.org/toEIC/official_data/toEIC_cefr.html\)

文部科学省\(2018\). 平成 29 年度英語力調査結果\(高校 3 年生\) 概要 Retrieved August 27, 2023, from](https://www.cambridgeenglish.org/images/461626-cambridge-english-qualifications-comparing-scores-</p></div><div data-bbox=)

https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2018/04/06/1403470_03_1.pdf

森住 史 (2015). 日本における EMI —現状と課題— 国際基督教大学学報, I-A 教育研究, 57, 119-128. <https://doi.org/10.34577/00003421>

日本学術会議 (2020). 大学入試における英語試験のあり方についての提言 Retrieved April 27, 2022, from <https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/kohyo-24-t292-6-abstract.html>

日本経済団体連合会 (2018). Society 5.0 —ともに創造する未来— Retrieved May 31, 2023, from <https://www.keidanren.or.jp/policy/society5.0.html>

Paragon Testing Enterprises (2017). Linking CAEL CE Scores to IELTS - Academic Scores: Full Report. Retrieved August 24, 2023, from <https://www.paragontesting.ca/wp-content/uploads/2018/01/Linking-CAEL-CE-Scores-to-IELTS-Academic-Scores-Full-Report-1.pdf>

Paragon Testing Enterprises (2021). Linking CAEL CE Scores to the Common European Framework of Languages. Retrieved August 24, 2023, from <https://www.paragontesting.ca/wp-content/uploads/2021/03/Linking-Study-Report.-CAEL-CEFR.pdf>

付録：換算表作成方法の詳細

各種英語資格・検定試験の点数の換算表 (表 7) を作成する方法を説明する。上述の通り、いくつかの試験においては各種試験の実施主体が点数の換算表を出しているが、それらの多くは受験者の点数の相関や順位パーセントの比較に基づいている。ここでは、各種英語資格・検定試験の点数をケンブリッジ英語検定で用いられているケンブリッジスケールへ換算する方法を述べる。

1. IELTS

IELTS は世界で最も受験生が多く、大学入学資格や移民資格に用いられている。目的が CEFR を意識したものではないため、ケンブリッジスケールと

表 8 IELTS スコアとケンブリッジスケールの対応

IELTS バンドスコア	ケンブリッジスケール
8.5	205-208
8.0	200-204
7.5	191-199
7.0	185-190
6.5	176-184
6.0	169-175
5.5	162-168
5.0	154-161
4.5	147-153
4.0	142-146

の変換も本来容易ではないが、もともと実施組織が Cambridge English であるため、両者の比較研究についてはほぼコンセンサスが得られた状態にある。Cambridge Assessment English が Web サイト上で提供している Scale Score Converter によれば表 8 のようになっている。両者のスコアが厳密な線形の対応ではないことがわかる。

Cambridge Assessment English (2019b) が公表しているように、IELTS からケンブリッジスケールへの変換にあたっては最低保証されているスコアを採用する。例えば IELTS バンド 7.0 に対応するケンブリッジスケールは 185 点とみなすのである。ただし、この表ではやはり IELTS のスケールが荒いことからくる誤差は否めない。そのため、一般選抜などのように 1 点刻みの点数による入試を行う場合には、IELTS は入試要件から削除しておくのも方法の一つであろう。

2. 内挿曲線による換算

次に IELTS 以外の各種資格・検定試験の点数をケンブリッジスケールへ換算する方法を述べる。そのために、各試験から公式に示されているスコアと CEFR との対応を用いる。各 CEFR レベルに該当するその試験の最低スコアとケンブリッジスケールの最低スコアを基準点として、その基準点を通る多項式曲線を求める。求められた多項式曲線を用いて最低スコア以外におけるケンブリッジスケールへの換算を内挿していく。最も単純な内挿多項式としては、各基準点を結ぶ折れ線 (1 次関数) とするもの

や、各基準点を通る最小次数の多項式が考えられるが、このような方法では基準点を境に内挿曲線の傾きが大きく変化することがある。このような振る舞いは、スコアの換算以前に各試験のスコア自体が持つばらつきを考慮すると、できる限り避けるべきものである。例えば100点満点の試験で50点を取った学生がもう一度同レベルの試験を受けたときに、その得点が学生の能力と比較して相当に上振れたものでない限り、50点より高得点を取る確率と低得点を取る確率に大きな差異が無いと考えられる。もし内挿曲線の傾きがある点を境に大きく変わっていると、本来は同程度の能力を持つと考えられる学生の点数の上振れ、下振れが得点の換算を通して非対称に反映されることとなる。そこで、ここではすべての基準点を通る多項式曲線のうち、曲線の傾きの2乗平均が最小になる曲線を用いて内挿することで、この問題をできる限り回避することを目指す。このとき、多項式の次数をどのようにとるべきかは自明ではないが、次数を無限大に取る極限を考えると基準点同士を結ぶ折れ線に近づいていくため、あまり大きな次数にすることは望ましくない。ここでは全ての試験の換算において共通して7次の多項式で内挿することにする。一例として TOEFL iBT のスコア換算のみ以下に示す。他の試験については換算表の完全版とともに著者の Researchmap マイページ (https://researchmap.jp/ssktds/published_works) において公開している。

TOEFL iBT は4技能それぞれのスコアが30点満点、総合スコアが120点満点であり、ETS (2021) に

表9 TOEFL iBT からケンブリッジスケールへの換算に用いるボーダースコア

TOEFL iBT	CEFR	ケンブリッジスケール
114	C2	200
95	C1	180
72	B2	160
42	B1	140

よって各技能スコアと CEFR レベルとの対応が与えられている。4技能それぞれの各 CEFR レベルに該当する最低スコアの和をとり、CEFR レベルとケンブリッジスケールとの対応スコアを用いることで、表9が得られる。この対応表を基準点とする内挿曲線を求めると次のようになる。

$$\begin{aligned} \frac{y}{120} = & \frac{35750000}{2703} \left(\frac{x}{200}\right)^7 - \frac{3961375000}{51357} \left(\frac{x}{200}\right)^6 \\ & + \frac{3286098750}{17119} \left(\frac{x}{200}\right)^5 \\ & - \frac{13567778125}{51357} \left(\frac{x}{200}\right)^4 \\ & + \frac{11150595125}{51357} \left(\frac{x}{200}\right)^3 \\ & - \frac{191974605}{1802} \left(\frac{x}{200}\right)^2 \\ & + \frac{312417719}{10812} \frac{x}{200} - \frac{858236918}{256785}. \end{aligned}$$

ここで x はケンブリッジスケール、 y は TOEFL iBT の総合スコアを表す。表7はこの多項式から求められた値の小数点以下を切り捨てることで得られる。